

# 展景

季刊

No.113



Spring 2024

目次

梅めぐり〈短歌〉	.....	河村郁子	4
如月のある日〈俳句〉	.....	新野祐子	6
春の雪〈短歌〉	.....	布宮慈子	8
白バラ〈短歌〉	.....	梅津純子	10
晩冬〈短歌〉	.....	大橋千佳子	12
アパルト〈短歌〉	.....	小野澤繁雄	14
〈那須通信 58〉手紙	.....	加藤文子	16
〈薫風颯々 32〉英語の力	.....	神村ふじを	20

対詠「ごぎげんいかか？」 PART 89	.....	小野澤／河村／布宮	24
前号作品短評 A	.....		26
前号作品短評 B	.....		30
無二の会短信	.....		32
編集後記	.....		36

今号のイメージ／ウド

梅めぐり

河村郁子

わが庭の紅梅はやばや咲き満ちて不可思議なりて近場見まはる  
菩提寺の梅の開花は如何ならん 杖つき千歩ほどを歩めり  
鐘楼のかたはらに座を占む紅梅はほほ満開に微笑むごとし  
重文の門のかたへの白梅の枝ぶり奇なりほころびちらほら

本堂より奥の院へと向かふ途に紅白梅の交じりに並みぬ

春一番吹きて五日目の長命寺 笑福亭鶴瓶つるべいさんのロケーションなり

境内に二頭の鹿ともみぢの木鹿せんべいの屋台も置かる

如月の十日は旧の元旦なり暖気にさそはれ小金井神社へ

天満宮とびうめに飛梅ありて五分咲きの白梅ゆかし靈験あらたか

若き日に太宰府天満宮の飛梅の紅白満開に歓喜極めし

如月のある日

映画「出稼ぎの時代から」受賞記念の会開かれる

新野祐子

江戸っ子の東北弁や冬あたたか

よみがえる野戦病院沈丁花

いのち積もる冬野をブルドーザー轟進

木っ端微塵とはこのこと狼咆哮す

ビル群は郷里の墓標寒鴉

聞こえくる凍土掘る音枕辺に

花岡の慰霊のほとり梅早し

まぼろしの珠洲原発へ牡丹雪

平和さんはあなたでしたか春隣

\*耳にしていた「平和」という名の方と初めて会話する。

日脚伸ぶ皆若やいで帰りけり

## 春の雪

布宮慈子<sup>やすこ</sup>

暖冬と言ひてわづかに緩みたるとき十センチの春の雪降る

春の雪よるのひかりに照らされてわんわんと降るしんしん積もる

春の雪しづもる街に唸りをり午前三時の除雪車のブル

春の雪とほき昔を連れてきて幼きわれはままごと遊びす

春の雪ピッチを白く覆ひたり戸惑ふのみのサッカー少年

春の雪インターネットの向かうには代執行さるる辺野古の海あり

春のゆき市川さんの旅立ちを詳しく記す便り運び来<sup>く</sup>

午前五時あわて鴉<sup>がらす</sup>の鳴く声す明けやらぬ空に春の雪ふはッ

早ばやとタイヤ交換頼みしが迷ふくらゐに降る春の雪

春の雪はげしく降れど日が昇り日の力にて緩んで消えぬ

# 白バラ

梅津純子

雪ひと日降りみ降らずみ暮れゆける夜の更けに聞く遠き雷いかづち

置き場所のここに定まる老眼鏡百均の小さき竹籠の美はし

壇上にて師より賜へる花束を見るいとまなく抱き帰りぬ

包み紙解けば出づる花束に赤や黄色の華やぎの無き

花束の花それぞれをよく見むと新聞紙広げ結束を解く

含みたる木蓮三本白き薔薇シンビジウムの蘇す芳色はう深し

花びらの内のかすかに青みたる白薔薇五本香りを持たず

八種もの花材生かさむ水盤は何処にありや永く使はず

白き薔薇活けつつ想ふ命かけナチスに抗しし「白バラ」の人ら

白きバラ五本が主なる花束をわれに選りたる人を偲びぬ

晩冬

大橋千佳子

図書館のエントランスのブックフェア古書店好きのシニアが集う  
古本は市民持ち寄り断捨離の決断の果て拾う神あり  
館内になき専門書つましくまた誇らしく箱に納まる  
小説と実用本が整然と並ぶ書架よりノンジャンルが好き

赤ちゃんを膝に絵本を読み聞かすパパたちの声耳新しく  
幼子は書架を往き来し吟味する貸し出し数が十冊なれば  
図書分類はいわば縦割り各書架に分散された目的の本  
澄まし声「その本ならばこちらです。」今日の案内は五勝三敗  
激励も叱咤も不要今はただ命継ぐ物資彼の地に届け  
陣取りで命を奪う。耕作放棄地にセイタカアワダチソウ

## アパート

小野澤繁雄

夏小屋もあるようなるが矮鷄<sup>チャボ</sup>これら子どもができて手狭になるや

保育園厨をみるやこの通りこまこまとした食器がならぶ

何もかも小さな花壇風車小花小花の間に小さく

集落は大階段を上り下る<sup>お</sup>みちなる昔大坂みちか

その花はうすくてと庭に奥さん申し訳ないことのようにも

ブランコは遊具としては長いようこの園にもひとつみどりいろ

人の姿をみない町内すれちがう車多くはデイサービスのもの

踏まれすぎわずかなれども霜柱ことし初めてなるがうれしさ

かえりみち一アパートにさわぎいし猫のことそれも何かの一部

アパートに裏庭のようなる地面ほそくつついて雨にも濡れる



手紙

加藤文子

納屋のあちこちに夫の制作したやきものが点在している。衣類を入れたはずのケースを開けると、やきものが姿をあらわす。ストックしておいた段ボールを使おうと思って取り出してみると、中から陶のオブジェが転がり出る。

あらためて納屋を確認したところ、思いがけない所に無造作に仕舞い込まれていることが判明した。

当初やきものは通路をはさんで向かって右側の領域に仕舞い、日用品やらその他を左側に納める、そう決めていたのだが、いつの間にか無効になっていったようだ。できるうちに、どうかしておかなければ先々困る。

この事態を打開するべく、全体を片づけていくことにした。

そのうちいくつかの衣装ケースには数十年分の手紙が入れてある。年賀状をはじめ、ハガキや封



書がぎつしり詰まっている。こちらも放つてはおけない量だ。目を通しながら、仕分けをする。パソコンのなかった時代は特別だ。巻紙に草書で流れるようにしたためられていたり、うっすら藍で染められた手漉き和紙の便箋と封筒に筆で大胆につづられていたり……。最近では滅多に手にすることのないような個性のお便りがたくさんある。ハガキも小さな文字で紙面いっぱい書かれているのが多い。近況やお礼、原稿の校正のやりとり、スケジュールの問い合わせなど、様々な用向きで手紙が交わされた。

読み返して覚えていることもあれば、忘れていてまるで初めて知ったように思える事柄もある。あたたかな手紙に心が熱くなったり、お世話になったのに感謝が足りなかったように思えたり、いちどきにたくさんの人々と会っているような心持ちになって、いろいろな自分が出てきて、心が揺れる。ここ数日、再会ムードになっている。

たくさんの方々から寄せられたお便り、今日もご縁が続いている方もあれば、途絶えてしまった方もある。けれどその時、その時、それぞれの思いでペンを手にした瞬間が、息遣いが文字から伝わってくる。なつかしの、なつかしのかつてが思い出され、現在、この今のことを考えている。読み返すいつかがあるのだろうかと思いつながら、心に留めておきたい手紙をもう一度仕舞い直す。

納屋が整うまでしばらく時間がかかりそうだ。



丹頂草の花とみどり

## 英語の力

神村ふじを

中学校から大学の教養課程までの8年間、英語と向き合わざるを得なかった。本来あまり英語が好きでなかったのかもしれない。8年間も勉強して話せるどころか英文の意味を理解するにも時間がかかる。ネイティブな話者の英語に至っては、早口過ぎて何のことを言っているのかさっぱりわからない。

自分の能力や意欲を棚に上げて、「日本の英語教育はてんでなっていない。文科省は何をしているんだ」などと教育のせいにしてしまう自分に気づく。自分が教育に関係していたことなどはるか彼方のことのように思ってしまう昨今である。

突然ウクライナの話になるが、ウクライナのゼレンスキー大統領が国連で演説したことがあった。ネイティブではないので、たぶん流暢な英語ではないのだろうが、私にも聴きやすくわかりやすい英語だった。ウクライナの窮状を訴え、国際的な支援を要請していた。

聴く限りでは、ウクライナ語と英語は似ている気がしないのだが、昔習った言語学では、インド・ヨーロッパ語族という分類があり、ひよつとしたら言語間に何かしら似通ったところがあった。抵抗なく喋ることができているのかもしれない。だとすると、ウクライナの子どもたちも英語を話したり理解できているのかもしれないと思った。以前台湾の高校生を交換留学生として学校に招いたことがあったが、彼らも英語には抵抗がなかった。国際化ははるかに進んでいると感じていた。

世の中の国際化は避けて通れない。ひよつとしたら、勤めている会社の上司に突然外国人がやって来るかもしれない。メールでもやりとりは英語でないと商談もまともならない時代がやって来ている。英語は日常会話として身に付けないよりは身に付けた方がいいに決まっている。

福島県の天栄村てんえいむらに「プリティッシュヒルズ」という施設がある。英国文化を体験できる施設として、1994年（平成6）に開設された。英語を学ぶということは英国文化を学ぶことというコンセプトのもと、「パスポートのいらぬ英国」として英国中世の荘園領主の館（マナーハウス）を中心とした街を忠実に再現し、英国文化のルーツを体感できるようになっている。

私の町では、この施設に毎年中学2年生を全額町の費用で送り出し、体験学習をさせている。ホテル形式の施設となっており、食事も宿泊もできるので、中学生たちは修学旅行が1回増えたような気分で、楽しく参加しているようだ。施設に入れば英語しか話してはならないルールがある。だ

から英国感にどっぷりと浸ることができる。

そのことで格段英語力が付くかどうかは疑問だが、英語というものを考える、また意識するきっかけになるのは間違いない。

帰って来てから、2年生の英語の授業を見たことがあった。授業に勢いがあり、英語を話すことに抵抗がなくなっていることがわかった。さっと手が挙がり、発音も元気で小気味よい。思春期真っ只中の彼らは、目立つことを嫌がり、わかっている手も挙げない授業を数多く見てきた。ところがである。「ブリティッシュヒルズ」帰りの彼らは明らかに違って見えたのだ。

英語で思い出すのは、高校生の時に見たハンフリー・ボガートとイングリッド・バーグマンの「カサブランカ」のことである。年配の層にはお馴染みの映画だったが、高校生の自分にとっては新鮮そのものだった。

その中の有名なシーン。ボガートがバーグマンにグラスを傾ける。「君の瞳に乾杯！」と和訳が出ていたので、乾杯したんだとわかったが、そのニヒルなボガートの発音がかっこよくてしびれてしまった。英語で何と言ったのか、なぜ「君の瞳に乾杯」なのか。そこまで考えればもっと英語力が付いたのに、しびれたところで終わってしまった。

大人になってから、「カサブランカ」は高瀬鎮夫という人の名訳の映画であり、「Here's looking at you, kid.」は直訳すれば、「君を見ていることに乾杯」になることを知った。それを「君の瞳に

乾杯」と意識したのは、流石としか言いようがない。

雰囲気は雰囲気として理解したので、映画好きの高校生には十分だったと思うが、わからない単語が出たらタブレットで調べたり、身近にネイティブのALT（外国語指導助手）がいる今の環境の中学生と比べれば、英語の力が付かなかったのも当然と言えば当然だったと自分を納得させている。

せめて洋画を見たときに字幕の力を借りないで理解することができたら……。BSのワールドニュースを直接理解することができたら……。もっともっと世界は広がるのだろうかと思う。

山形県の子どもたちは、三カ国語を話せる。英語、日本語、山形弁。「バイリンガル」ならぬ「トリリンガル」だと言われるようになることを願って止まない。

朽ち果てし戦車の骸春の泥 ふじを

N K O  
 小野澤繁雄  
 河村 郁子  
 布宮 慈子

ご夫君を先になくしたそのことが市川さんをしのんでひとつ  
 年賀状の数の減りしをうべなふも老いの暮らしのさまざまを知る  
 年賀状これが最後と告ぐるとき身体わづかに軽くなりたり  
 パラパラと下二桁を確かめて今年もひとつ切手シートは  
 年賀状に今年で終はるの付記増えて老後の孤独楽しむらしも  
 不登校の孫もつ人と共に観る「夢みる校長先生」たのし  
 よりそわれそうもかたちで老夫婦山の万座にきている幾組  
 1月16日 O  
 1月30日 K  
 2月3日 N  
 2月7日 O  
 2月16日 K  
 2月22日 N  
 2月27日 O

近隣にワンルームマンション三棟建つ若者たちの結婚離れ  
 ひな祭り雪国なれば谷地にてはひと月遅れに雛飾りする  
 訪れてしる名のひとつ花巻に花巻人形人にかぎらぬ  
 雛の日に手巻き雛すし食<sup>た</sup>べたり救急車の中義兄<sup>あに</sup>の付添ひ  
 ひな市は月遅れなり間もなくといへど山形は雪化粧の朝  
 何か輪はミーティングしているや朝日曜はおじさんらソフトボールに  
 卒寿とてうからやから十人が揃ひてくる我が家の賀なり  
 卒寿とふ河村さんに驚きて初に会ひたるころ思ひ出づ  
 男の子となりにつか眠り込むワンマン一両そのなかのこと  
 義兄<sup>あに</sup>上の九十九歳八ヵ月年功積みきて閉づるは刹那  
 年度末過ぎて迎ふる春の日に白梅かをる今日は清明  
 どこの桜ということもなく若木二、三いつもことしも少し遅れて  
 2月29日 K  
 3月3日 N  
 3月6日 O  
 3月16日 K  
 3月21日 N  
 3月25日 O  
 3月26日 K  
 3月27日 N  
 3月31日 O  
 3月31日 O  
 4月4日 N  
 4月9日 O

前号作品短評A 〈小野澤〉

●睦月なかば義兄あにのコロナ感染が姪と吾とに 監禁七日

河村郁子

姪と吾とに強いるものとなった、それが監禁七日か。

評者も、この十月に感染した。クリニックの注意に、外出自粛が推奨される期間として、（発症日を○日目として）五日間経過するまで、かつ五日目まで症状が続く場合は、熱が下がり痰や喉の痛みが軽快し、二十四時間程度経過するまで、が記された。これに、同居する方も五日間までは、じしんの体調に注意すること。七日目までは発症する可能性があること、が含まれていた。監禁七日は、このような期間か。

一連体言止めも多く、全体にキビキビとした運び。このあとで、（義兄の転倒を起こそうとして）腰椎圧迫骨折になる（三首目）。

入院中から、また退院後もリハビリに励んだ、

自らの身は自らが守るべき来しかた今までなかりし日常

来しかた今までなかりし日常、という表現が丁寧で独特、いい。

ところで腰椎圧迫骨折、リハビリ、十年日記、体育会系ひとり合宿（これは比喻）、タニタ体重

計、三年日記、と歌は順に項目的でもある。振り返っている。

八十歳代最後の一年の貴重なり 先づは十年日記のしめくり

評者も七十五歳となって、五年（連用）日記の最終年となった。次を三年日記にしようとしている作者にかさなる思いはある（一連最後）。

●さわやかや讃岐の衆の心意気

新野祐子

さわやか、はさっぱりとして気持ちのよさま、秋の季語である。讃岐の衆をみちびく言葉でもある。（香川の）句友が登場するところ。その最初の三句は、手をつくしてする紹介、か。善人、善人のあかし、という入り方である。善人という言葉で、ブレヒトの寓意劇「セチユアンの善人」を思い出した。

この句につづいての句、その場所は「（錦繡の）蔵王（…）」とタイトルにある通りか。描写するに案外むつかしい雲海。登山シーズンだから、雲海は夏の季語になるという。その次の句も含めて場所は蔵王か。雲海の広がり、火口湖の深み、そこにあるもの、そこにしかないもの。力業である。

雲海のかくまで広き眺めかな

火口湖の底に秋思を見つけたり



山寺、茂吉館の句がつづく。全体に臨場感、即興性のある句である。そのなかで、この句がいい。ましら酒（猿酒）が秋の季語。ましら酒にも不思議はある。

險谷より湯気立つ不思議ましら酒

● 順ぐりに古稀といふもの迎ふれば身軽にならむと頭めぐらす 布宮慈子

下句「身軽にならむと頭めぐらす」だが、そのひとつがここでは小屋の片づけか。

四年は触れていなかった小屋、その中。土間でもあるそこに並んでいる漬物ら、果実（ハーブ）酒の類い。そのなかの弟切草酒、こんな歌になる。

ありし日に家の誰かが飲む様を見しことあらず弟切草酒

弟切草は、鷹匠たかじょうの兄弟の物語に由来するという。ここでは鷹の傷の特効薬として家伝の秘密になっていて、弟が別の鷹匠の家の娘に恋をして、この家伝の秘密をその娘に洩らしてしまった。それに激怒した兄が弟を切り捨てるという、そういう伝説である。

漬物小屋でもあった小屋（物置）の片づけをしたことがあるので、よくわかるところがある。まとめでは、この歌か、

小屋とふは異界のごとし何もかも呑み込み隠し時間を止める

後段は、植え替えをしたナツメヤシ（棗椰子、果実がデーツ）の話。ヤシ科の高木（八首目）。

こちらにも身軽さがある。秋の日である。

秋の日にナツメヤシに留まりゐしトンボの身軽さ思ふしばらく

●秋日にもなれるその日々朝寒に昨日のわれがめざめることし

小野澤繁雄

「秋日」は一般的には「しゅうじつ」と読むが、短歌や俳句の短詩系では「あきび」と読ませることもある。秋の日を指す。季節が秋になってきたこの日ごろ、明け方のうすら寒さに新たな一日ではなく、昨日の自分のまま目覚めたような気分、と読んだ。スツと起きるのではなく、なにか錯覚したように布団の中でしばらく様々な考えが浮かんでゆつくり起きたのだろう。

昼までの雨が上がり出て出る秋日ホールに聴いているブラームス

こちらは、雨上がりに出かけて秋の一日をコンサート会場で過ごしている場面。聴いたのはブラームスの交響曲だろうか。なぜかブラームスには秋という季節がぴったりくるようだ。美しい一首に仕上がっている。

●老いのすなる白内障の手術をばわれもしてみむとてするなり

梅津純子

紀貫之の『土佐日記』の有名な書き出し「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」を下敷きにした歌。本歌取りに近いかもしれない。老人がするという白内障の手術を、自分

もしてみようと思つて手術するのである。ユーモアのある導入部だ。白内障の手術は簡単という人もいるし、そうたやすいものではないと釘を刺す人もいる。その迷いや悲壮感を振り払うように手術に臨んだ作者。とはいっても病院は事務的に事を進めるところであり、次の一首は如実にそのことを示している。

あな恐ろし手術説明同意書に失明といふ例までありて

白内障には退院日和と看護師は小暗き窓の雨に眼をやる

天気が変わるいほうがいい、そういうこともあるのだ。看護師のひと言ひと言が身にしみる場面である。白内障手術という一大事を前にして、作者にとっては内面をすどく見つめる体験となったのではないか。

己を客観視すること、時にはエスプリをきかして作歌する態度、多くを学ばせてもらった一連であった。



◆一一〇号(二〇二三年夏号)に小野澤さん布宮さんが拙歌集『白き川』の評の中で、もろさわようこの「志縁」という造語にふれている。『沖繩ともろさわようこー女性解放の原点を求めて』の共著者である河原千春さんと源啓美さんが三月十三、十四日に長井市(山形県)にくるようになった。女性史をもろさわようこの実践から研究している河原さんが、修士論文を書くための取材らしい。もろさわの「歴史を拓くはじめの家」で知り合い、三十年余の友人である源さんは一月に転んで肩を骨折したというのにどうしても来たいという。研究の役に立てるかどうか心もとないが、もろさわの『信濃のおんな』を読んだ日から四十年余りにわたる己を振り返っている。「今あるところのものでない、あるべき姿を求めて繋がった『志縁』の人々」を思い浮かべながら。ここまで書いたところで、源さんからもろさわさんが亡くなったとメールが入った。九十九歳という虚をつかれた思いだが、源さん河原さんの共著出版から半年余り、思い残すことなき旅立ちだったと思う。

梅津純子

◆まだ先のことと思っていた確定申告の期間になっている。市内会場の文化センター駐車場の係員に聞いて、会場内、やはりe-Tax(電子申告)になっているようだ。パソコンを持ち込んでいる。じぶんは、事前に、書類がそろったところで、最寄りの税務署内、税務相談のかたちで、確定申告をすませている。これは例年、そうしている。また、サポートをうけながらだが、e-Taxでもある。スマホからのe-Taxも可ということ、(すすめられてもいるところ、)そういう姿もある。じぶんはスマホをもたないので、パソコンからである。書類上ながら、一年の生活のおさらいになった。少額だが、(国税の)還付もある。ただ、あと何年、こんなことができるだろうか?ともおもう。七十五歳になって、運転免許証を更新するにも、高齢者講習が求められた。小野澤繁雄

◆「とにかく居てくれればいいから。」……それじゃ漬物石かと内心毒づきつつ始めた土曜日の図書館アルバイトも、半年経ってだいぶ勝手がわかってきた。世の中にはいろんな出版物があり、分類に従ってきれいに並べているのだなと感心。一方、分類法は便利な半面、探したいものの全体が見えないことにも気づく。例えば、近年話題の発達障害について知ろうとすると、教育・社会福祉・医療・随筆・文芸・芸術など様々なジャンルの本が書架に散在している。そこで司書の出番、なのだろう。利用者の満足度が増すよう、素人の自分こそプロとのつなぎ役になりたいと勤務している。

大橋千佳子

◆ここ数日、鉛色の空から白いものがちらついている。寒の戻りと言うのだろうか。咲き始めた福寿草は花弁を引っ込めてしまいそうだし、クリスマスローズも苦しそうだ。あんなにほかほかとした陽気だったのだから、びっくりしていることだろう。でも、三寒四温とはよく言ったもので、一歩一歩春が近づいているのは間違いない。この雪雲が去っていけば、もう春である。

「待春や通学少女の鈴が鳴る」

神村ふじを

◆思わず、独りで歓喜の声を上げた。大谷翔平さんの結婚報道である。きっぱりと発表した爽やかさにも心打たれた。一昔前、いや、つい先ごろまでは「日本人とは、会話がなく、ただ、ニタニタしているだけだ」と言われていた。政治よりもスポーツが逞しく国際人として活躍してくれた。大谷翔平さんのように、堂々と技量・人格ともに尊敬される日本人が出てきましたね。 河村郁子

◆白鷹町の有志で作った映画「出稼ぎの時代から」が、昨年十一月「地方の時代」映像祭で、「市民・学生・自治体部門」において奨励賞を受賞した。この二月十八日、その記念の集会を開いた。出稼ぎの現場であった川崎市宮前区の方々とすでに交流が始まっており、宮前区まちづくり協議会との共催である。元NHKアナウンサーの長谷川勝彦さんによる朗読（三浦哲郎著『沈丁花』）、宮前区出身の映像作家 小倉美恵子さんのスライド上映、ジャーナリスト永田浩三さんの講演と、

盛りだくさんの内容だった。会場の白鷹町文化交流施設「あゆーむ」のホール二百席は、ほぼ満席となり、熱気にあふれた。来場者からは、興味深くて余韻の残る良い催しだったという声が多々寄せられている。映画製作委員の一人だった私はとしては、「祝賀会なんてしなくても」と思っていたが、監督の本木勝利さんは先のことを考えていたのだ。一つは町ぐるみで（行政を巻き込んで）宮前区との交流を活発にすること。もう一つは、現在進めている本づくりを多くの人に知らせ、出版の折には買ってもらう、ということだ。野党の町議会議員を十一期も務めた本木さん、なかなかの策略家だな。それに彼の応援団がものすごく多いのだ、特に女性に。改めて感心した次第である。

「地方の時代」映像祭は一九八〇年に始められた。九六年には、山形放送が制作した「届け！クマタカの叫び」が、「放送局部門」で優秀賞を受賞している。当時、朝日連峰の山中では大規模林道工事が行われていた。それに反対する白鷹町の「葉山の自然を守る会」の活動を取材したものだ。二〇〇一年には、白鷹町教育委員会が製作した深山和紙についての記録映画が、「市民・学生・自治体部門」で奨励賞を受賞した。深山和紙は山形県無形文化財に指定されている。こうして見ると、白鷹町も捨てたものではないな。

新野祐子

◆冬から春にかけての作品がそろった。テーマはそれぞれだが、住んでいる地域によって季節の移り変わりが感じられて面白い。特に短詩系においては、生活や人生観が四季と深く結びついていることを改めて思ったところである。

◆お国自慢をするつもりはないが、山形は米、酒、蕎麦がうまい土地である。水がよいからだろう。しかし、ことしの冬はハラハラさせられた。一月も雪は少なく、雪かきは数回ほど。二月はほかほか陽気になって、このまま一気に春になるのか、と思うほどの天候が続いた。山にも雪は少ない。雪がなければ蔵王も月山も、ただの山である。月山の夏スキーを心配する声も聞こえてきた。ところが三月になると急に寒さが戻り、どんと雪も降るといふ、月が逆になったような天気になった。かなり年配の人に言わせると「お彼岸に雪は降るもんだ」とのこと。なるほど、降った降らないで慌てることなく、そう構えていればいいのか。含蓄のあることばである。三月に降った雪のおかげで、月山は真っ白く美しい形を見せている。田んぼの水も大丈夫だろう。

蕎麦のおいしい季節となった。桜のころに食される寒ざらしそば。「玄ソバ（殻のついたそばの実）を大寒の日から十日間ほど冷たい清流に浸け、これを引き上げて蔵王から吹き降ろす寒風に晒して乾燥させて挽いた粉でそば打ちします。このような手間をかけることにより灰汁や渋みが抜けて、風味と甘みの際立つ『寒ざらしそば』が出来上がります」（庄司屋ホームページより）。五月の終わりから六月にかけて出てくる天保そば。「幻のそば」といわれるわけを以下に紹介する。期間や店も限定される、寒ざらしそばと天保そばにことしも出合えるだろうか。

そばの話「幻の山形天保そば」（酒井製麺所ホームページ）

<https://www.sakaiseimen.com/?mode=f18>

（布宮慈子）

# muninokai.com

113号より上記サイトのオンライン版発行のみとなっています。

季刊 展景  
113号

二〇二四年四月十五日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一―七―二〇二

[info@muninokai.com](mailto:info@muninokai.com)

Copyright © 2024 MUNINOKAI. All rights reserved.